

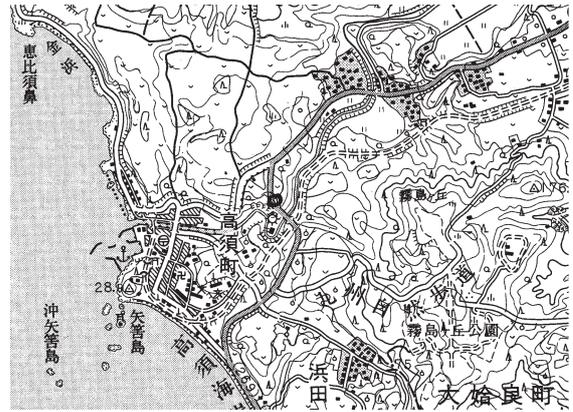
(鹿屋市高須町岩之上)

位置と環境

遺跡は高隈山系の裾野から広がる広大なシラス台地の先端部に所在し、市街地の中心から南西側へ約7km離れた位置にある。西側は鹿児島湾に面し、東側は高隈山地に源を発する高須川の河口に位置し、古くは中世以来大隅半島の要港として栄えた地でもある。ここは高須町の北西部の標高約50mに位置し、台地の先端部は急崖となり、この川を挟むようにして、北西側には立神遺跡や榎木原遺跡が存在する。山と海と川を取り込んだ格好の生活空間であったと思われる。

調査の経緯

一般国道269号線道路新設工事に伴い、建設工事に先立ち鹿児島県鹿屋土木事務所は、計画路線内の遺跡の有無について鹿屋市教育委員会に照会した。これを受けた鹿屋市教育委員会は、昭和59年に分布調査を行った。その結果、昭和60年に確認調査を実施し、埋蔵文化財包蔵地であることが明らかになった。そこで、鹿屋市教育委員会は県土木部から調査委託を受け、調査主体となり、昭和61年に県教育委員会の協力を得て計画路線内の本調査を実施した。



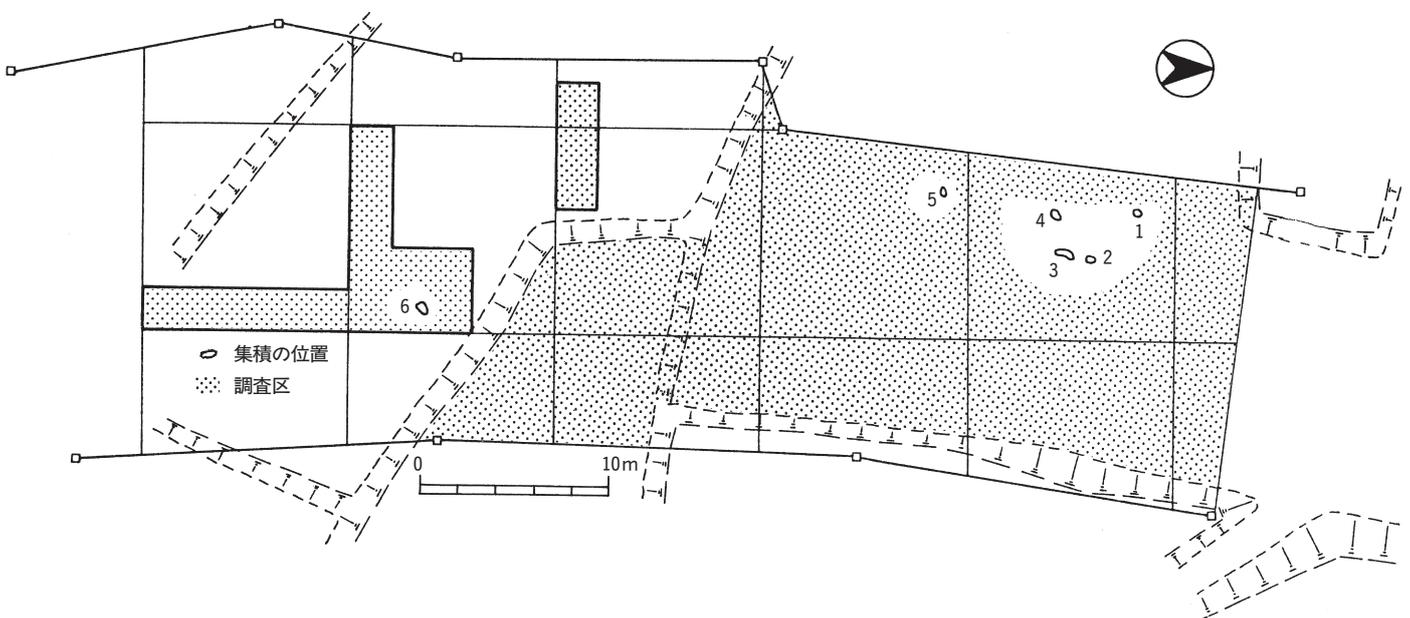
第1図 岩之上遺跡の位置

遺構と遺物

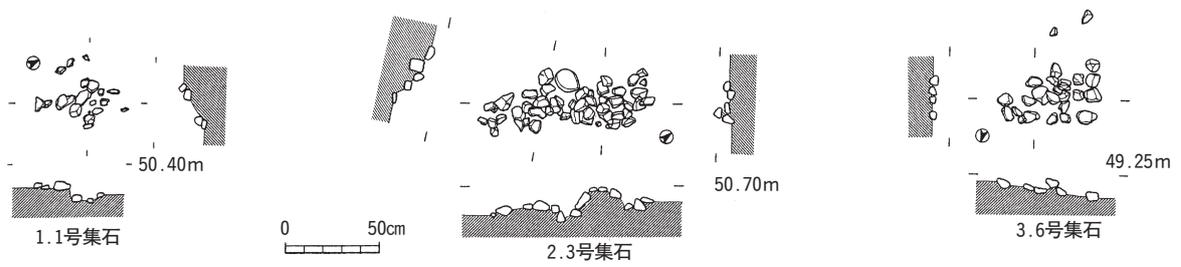
昭和60年の調査では、縄文時代の土器片を確認したものの小片が多く、完形品として復元できるものはなかった。

昭和61年の調査では、アカホヤ火山層の下から縄文時代早期の遺構と遺物が発見された。

縄文時代早期の遺構は、礫群1基と集石6基が確認された。礫群は河原石や火を受けた石、風化した石片等が同時に平面的に混在した状況でみられたが、その性格は不明である。集石(第3図)の特徴として、1号集石が正方形に近い状況で礫片を構成するもの、3号集石は不正円形に礫群を構成するもの、6号集石は若干間隔を有するものにと分類できる。礫の数は3号集石を除いては10個前後から30個と少



第2図 調査区及び集石の位置図



第3図 集石

ない。礫の中には、加熱されたと思われる石片も存在している。この礫片は平面的に配置され掘り込み等の下部施設はいずれにおいても確認されず、焼土・炭化物等も確認することはできなかった。縄文時代のこのような集石遺構は一般的には蒸し料理の場として考えられている。

縄文時代早期の土器は、石坂式土器（第4図1～7・11・12）、吉田式土器（第4図8～10）の貝殻文系円筒土器が出土し、それぞれ1点ずつ復元資料が得られている。

縄文時代早期の石器は、石鏃（第4図13）、磨石兼凹石（第4図14）、石皿が出土している。

特徴

貝殻文系土器に伴う石器には、石鏃の出土量が少ない傾向にあったが、地域的特徴によるものなのか今後の調査による資料の増加を待ちたい。

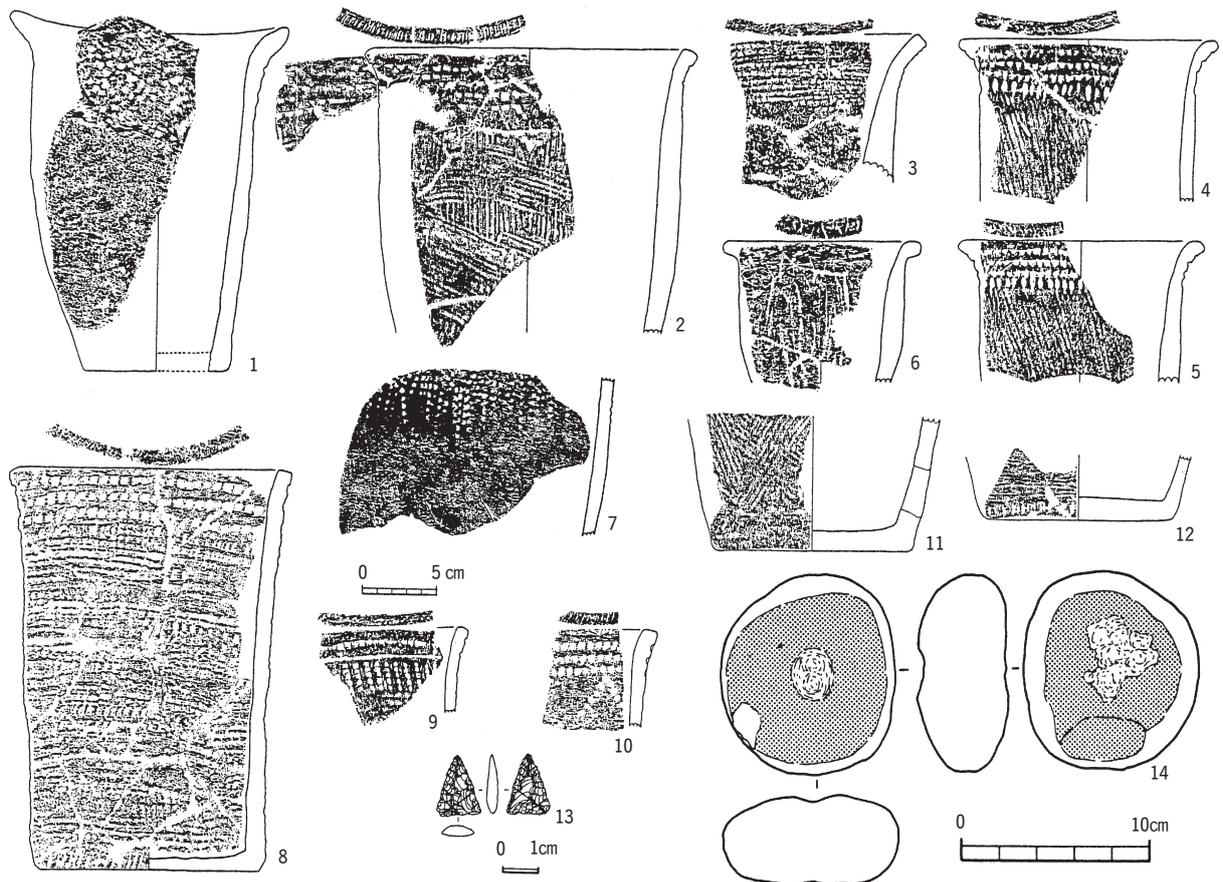
資料の所在

出土遺物は、鹿屋市教育委員会に保管されている。

参考文献

鹿屋市教育委員会1987「岩之上遺跡」『鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書』6

（山口俊博）



第4図 出土遺物